

お詫びと訂正

創刊号の拙文「作器者の判断の問題」で、わたくしは 33 頁の資料 3 に掲げた銘文の摹本に依拠して、16 頁に「資料に挙げたように同じ銘文を持つ器が二つ出てきています。たしかに銘文は同じなのですが、二つを見比べてみると、左のほうは字画を失っている文字が非常に多く、うまく作れなかったということがわかります。……今回注目する「賓」という字が、左の青銅器では流れてしまってまったく残っていません。」と述べ、さらに 18 頁では「明らかに昔雞が作った器と同じ墓の中から、韓侯の作った器が出土するのはおかしいじゃないか、となるわけです。この当然の疑問について、私は次のように考えています。——韓侯の立場で銘文を起草し、韓侯の依頼で周王室の工房で二つセットの殷という器を作った。韓侯は昔雞のおかげで周王室から恩恵を得たので、作った殷を昔雞にプレゼントすることにした。はじめ左側の銘文の器をプレゼントしたのだけれど、これは文字も欠けていて不完全である、もしかしたら昔雞のほう「こんなのは嫌だ」と言ったのかもしれませんが、ともかく、きちんとできている右側の銘文の器も贈った。だから二つとも昔雞の所有になった。」と推論していますが、このたび、呉鎮烽編著『商周青銅器銘文暨図像集成三編』第 1 卷（上海古籍出版社、2020 年）で私のいう「左側の銘文の器」、すなわち「0484. 昔雞簋乙」の銘文拓本（581 頁）を確認したところ、銘文のうえに鑄が生じているために肉眼では字画を認めることができなかつただけで、「字画を失っている文字が非常に多く、うまく作れなかった」とか、「文字も欠けていて不完全である」とかということではないとわかりました。

読者のみなさまに誤った情報を伝えてしまいました。この場を借りてお詫びし、18 頁の推論を「韓侯の立場で銘文を起草し、韓侯の依頼で周王室の工房で二つセットの殷という器を作った。韓侯は昔雞のおかげで周王室から恩恵を得たので、この殷のセットを昔雞にプレゼントした。だから二つとも昔雞の所有になった。」と訂正します。（佐々木研太）

編集後記

『両周金文研究会会報』第 2 号には 1 本の書評と 1 件の教育情報、1 件の研究情報を収録しました。佐々木原稿は 2020 年度東京学芸大学公開講座「中国古代の青銅器銘文（金文）からみた漢字の世界」（2020 年 9 月 28 日）における同氏の担当部分をまとめたものです。書評の執筆経緯は附記に記載の通りです。研究情報は、別に簡易製本のうえ発行していたものですが、印刷部数も少なく、PDF も存在しないことから、今回再録するものです。両周金文に関心をもつ方に、お役に立てれば幸いです。（下田）